

好きこそものの上手なれ

回胴倒錯者

— PACHISLO FREAK —

罵倒

つい先日入社した2人の新人UとH。同じ時期に入社したためか、とても仲が良く、さらにライバル意識もあるのか、とてもいい働きぶりだった。何事にも果敢にチャレンジし、常に研究を怠らない。そんな姿勢だったためか私の教育も自然と厳しくなる。それでもめげずに、また、失敗を恐れずに、何から何まで挑戦していった。1ヶ月もすると従業員たちも彼ら2人を信頼し、難題があるとすぐに彼らに任せるといふ流れができていた。もちろんそれでも解決できないときは班長が呼ばれ、班長不在なら私が呼ばれる。しかし、彼らは私を呼ぼうとはしなかった。それが私に対する遠慮なのか、自分でできるというアピールなのか、自分できないが、私にとってはお客様を待たせるという愚行としかとれなかった。なので私は多少もたつく場面があると、呼ばれずとも自分が出て行くようにしていた。私の中の優先順位は常に「お客様」が1番だからである。

閉店を迎えると2人を事務所に呼び出す。

「なんでも自分で出来ると思っているのか？」

「副主任の迷惑になってしまっていると思いました」

どちらがこの言葉を発したかは覚えていないが、この言葉を聞いた直後に鬼のような権幕で怒鳴り散らした覚えがある。

この出来事以来、私に対する遠慮はなくなり、分らないことはすぐに聞くようになった。その反面、この2人には余計なものまで根付いたようだった。

この罵倒事件のある日の営業中、お客様の遊技中の台が故障し、慌ててH君がその台に駆けつけていた。事務所から監視カメラを使い、私もその様子をうかがっていた。どうやらレバーが反応しなくなり、リールが回らない様子だった。もちろんこの場合は速やかに壊れたレバーと正常なレバーを交換すれば問題はない。壊れた台が「主役は銭形」で多少交換がめんどうくさい機種ではあるが、H君には既に教えてあるから大丈夫だろうと、安心してその対応を見守っていた。しかしそう簡単には運ばなかった。監視カメラをズームし、H君の手元を見ていると、その手に握られたプラスチックパイプはブルブルと振るえ、なかなかネジが外せない。やつとの思いで外したネジも手元からこぼれ、それを必死に探している。コイツはいったい何をやってるんだ？と最初はのんきに構えていたが、あまりの手の悪さにイライラが徐々に積もってくる。そのイライラが限界を迎えようとしたその時、レバーの交換は無事終了し事なきを得たのであった。

提言

「H君、ちよつと事務所」

「あ、はい、了解です……」

「おまえ、何やってんの？」

「いえ、急いで対応しないとまた副主任に怒鳴られると思い、緊張と焦りでうまくできませんでした。すみませんでした」

「なるほど、そういうことか……」

「その生徒とは反対に、私はその言葉に……とし、言葉を失いました。私は中学時代、勉強しなくても数学だけはトップクラスを維持し、この素質は誰にも負けないと思っていました。しかし、高校になると数学さえも徐々に成績は降下していったのです。このとき「数学的なセンスなど私にはなかったのだ」と思っ



主役は銭形（左）とリール配列などは似たルパン（右）に次ぐ3代目リール配列などは似た点も多いが、前2作のような技術介入性は乏しい。

役職が増え、従業員にもゆとりができ、店の雰囲気も上昇気流に乗っているまさにその時、事件というものは起こってしまうもので、その事件がもとで様々な負の連鎖が生じてしまうのであった。

「なるほど、そういうことか……」

才能と努力

「お前は本当にそういうところが正直だよな。いいよ、わかった、2人とも同時に昇格だ。さっそく2人を呼んでくれ」

「はい」

2人が事務所に入ってくると店長が口を開く。

「よく頑張っているようだから来週から2人とも班長にしてやるよ。もちろん勤まらないようならすぐに降格だ。コイツの推薦だから、コイツに迷惑がかららんようにしっかりやってくれ。ひやはは！」

「はい、ありがとうございます。一生懸命頑張ります！」

かなりすんなりと話が通つたのである。なにほともあれ、これで副主任が2人、班長3人と、役職者がかなり増えたわけだ。私も後続に追い抜かれることのないように、日々精進していかなければいけない。

あの人は目押しが得意だから、あの人は知識が豊富だから、あの店はお客さんが多いからなど、人を羨ましく思ったり、ねたんだりしたことってないですか？ だれでもあると思います。そしてたいの人はそれをその人の素質や才能と思いついて、そのようになりたいと思いついても諦めていきます。はたして本当にそうなのでしょうか？ 最近あった私の経験を一つ挙げてみたいと思います。

「こうまでしないと、素質ある人、センスのある人には勝てませんから。」

笑顔でそう語るその生徒とは反対に、私はその言葉に……とし、言葉を失いました。私は中学時代、勉強しなくても数学だけはトップクラスを維持し、この素質は誰にも負けないと思っていました。しかし、高校になると数学さえも徐々に成績は降下していったのです。このとき「数学的なセンスなど私にはなかったのだ」と思っ

「なるほど、そういうことか……」

「なるほど、そういうことか……」

「なるほど、そういうことか……」

A氏プロフィール

三重県出身。三重の高校を卒業後、進学のため大阪へ。学業よりもパチスロに専念してしまいお決まりコースの大学中退。中退後3年間はパチスロで生計を立てる。その後サラリーマンになるも副収入はパチスロで。結婚のため三重に戻りホール店員となる。現在は知識と経験を生かし某店で設定師として手腕を振るっている。目押しレベルはスイカの種まで直視できるほどの異常っぷり。



店長までも巻き込み、いろいろな憶測が複雑に絡み合う。その事件とはいったい？

次回「疑惑をうご期待！」

ぶやいた独り言に対して、その生徒は「え？この解き方で合ってますか？」ある問題を指差し、そう質問してきました。慌ててその解法を見ると、それはお世辞にもセンスが感じられる解法ではありませんでした。「それで十分、そのまま続ければなにか発見がありそうです。君の場合はそれでいい」私はそのやたらと遠回りだけと貪欲に解こうとしている解法に、あらためてその意気込みを感じたのです。

素質や才能、センスといわれるものは実際に存在すると思います。しかし努力はそれらを遥かに凌駕します。だが見ても羨むその人は、素質やセンスもあるでしょうが、きつとそれ以上の努力で成しえたものなのです。打ち手にしろ、ホールにしろ、その他どんな職業でも、努力なくして発展などありえません。自分ができることや会社ができることは本当にそれだけなのでしょうか？ なにか難題に直面したとき、真つ先に「できない理由」を考えていませんか？「相手が強いから勝てない」「私は○○だからできない」「あの人は頭がいいから……」。現状に満足できない点があるならば、遠回りをしてでも貪欲に模索していかなければいけないのです。